

大前狼

1928年～1932年 【全6卷】

限定
100部



昭和初期、京都・大阪・神戸・名古屋の同人たちは、中央への反骨精神を原動力として探偵雑誌『獵奇』を発刊した。『新青年』を対抗視する本誌は探偵趣味と映画評論という複眼を有し、小説だけでなく、創作シナリオ・翻訳・隨筆・犯罪実話・『獵奇歌』・辛口批評で全国のファンに熱狂的に愛された。前誌にあたる『探偵・映画』を付して約90年前の『獵奇』という名のロマンチズムを復刻！

幻の探偵雑誌、 全号復刻！

卷之三

第2回配本		第1回配本	
第6卷	第五年第一輯～第五年第五輯 （巻末に収録）	第4卷	第三年第一輯～第三年～第四輯 ★付録II『探偵・映画』創刊号+11月号
		第5卷	第四年第一輯～第四年～第七輯
		第3卷	第二年第七輯～第二年第十二輯
		第2卷	第二年第一輯～第二年～第六輯
		第1卷	第一卷第一号～第一年～第七輯 ★解説・総目次・執筆者索引付



三人社

〒606-8316
京都市左京区吉田二本松町4 白亜荘
電話 075-762-0368
FAX 075-762-0369
振替 00960-1-282564

※図書館様・書店様へ
小社は少部数出版のため取次口座はございません。ご注文は直接上記までお申し込みください。

猶奇
復刻版概要

主要執筆者一覽

表示はすべて税別

夢の入口はどこにでもある。出口はどこにもない。

浜田雄介（成蹊大学文学部教授）

監修の辞

『獵奇』二巻六号の小酒井不木追悼号に、天翔るジャーナリスト北村兼子が一文を寄せており、万国婦人參政権大会のために渡独する直前、立ち寄った大坂毎日新聞社の受付で名を名乗ったところ、たまたま居合わせた青年から原稿依頼を受けたと。小酒井とのニアミスに終わった挿話を記して「日本を去る私の絶筆」と結んだ北村は、二年後には二八歳の若さで命を失うことになる。そんな物語までは知るよしもなかつたとはいえ、初対面の北村に躊躇なく原稿を頼む『獵奇』編集者の「活動的な怜悧性」（北村）は、やはり冴えている。

乱歩によって結成された探偵小説の作家と愛好家の親睦組織「探偵趣味の会」があつた。震災前後、様々の新興芸術が生まれ、円本ラッシュによる文学世界の再編が進む中で、やがて乱歩は東京に移住、横溝正史も博文館に入社して『新青年』に関わり、趣味の会の機関誌『探偵趣味』も春陽堂の発売に移行する。言わば東京中心に探偵小説は結晶化し市民権を得て行くのだが、一方で冷めやらぬ京阪神の探偵熱は、『探偵・映画』を刊行し、『獵奇』を創刊することになる。だから『獵奇』には、編集同人たちの親密で怜俐な活動感覚とともに、新興芸術としての探偵小説が成熟の過程で失つていった夢が息づいている。

雑誌の名前がジャンルに冠せられることになる『獵奇歌』は夢野久作の作品中でも異彩を放つ珠玉群だが、『獵奇』誌上では夢野作品だけの名前ではない。編集同人はこれを範として投稿を募り、奇想を盛る器にしたのである。ほかにも、ゴシップや毒舌は探偵趣味の楽しみから逃れられないマニアの夢をせめて形にする手段であつたろうし、それは相互批評や連作の企画にも通じよう。「頁数がないので小説はこれという力作も載らなかつた」（江戸川）との評もあるが、小説にどこかしら筋書き風の印象がつきまとうのは、実は熟成を待てないほどに奇想が熱を持っていたたか。

そのような雑誌であればこそ、復刻版の刊行は、時代の文脈を楽しむとともに探偵小説史や文学史を見直す契機にもなるだろう。

三人社は、今後この方面の掘り起こしに力を入れる企図と聞く。大いに期待したい。

作創拾つた遺書

こんな遺書を拾ひました。原稿紙にぎつしりペンで書き埋めています。誰のものか勿論私は知りません。鐵道線路から丁度一丁ばかり離れた所に危く小溝に落ちやうとしてあつたのでした。かなり時日の経過したらしくのは上の一枚が殆んどかすれて読み取り憎い迄になつてゐる事が證明してゐます。だから最初の一小部分だけ多少筆の加はつてゐる事は初めから御承知置下さい。

では原文の儘御らんに入れる事に致しませう。

×

月並な文句は書かない事にして置かう。どちらみち俺が死んでも泣いてくれる人は一人もゐないんだから。

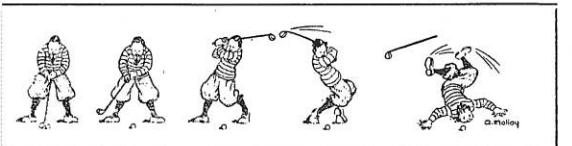
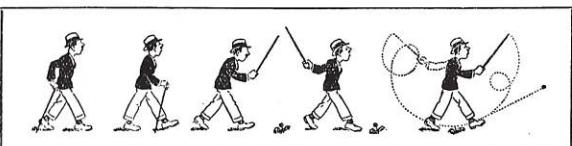
後五時間。柱時計が十一時を打つを合図に俺は此の家を出る。あそこへ出る迄丁度一時間と二十分。一時半の下り急行が来る迄には約二十分の時間がある。それだけあれば充分だ。念佛の一回位ひは唱へる餘裕があらう云ふもの

いや、俺はそんな事を書いてゐる暇はないわけだつた。俺はさうして二人を殺す氣になつたか？それを俺はどう云ふ方法で行つたか？そして又俺がさうして自殺せねばならないくなつたか？それ等の事を俺は書き残して置かねばならない筈だつた。

それは戀。戀だ。俺は一人の女を戀した。彼女は美しかつた。白百合にも似た美しさだつた。そして俺の友人青木の家の従妹だつた。いや厳格に云へば青木の叔父の娘だつた。彼女に初めて會つたのは青木の家で開かれたかる会だつた。かるた會から戀が産れる……何と云ふ家庭小説めいた事か……でも事實だからどうにもならない。 彼女は明るい女であつた。彼女が笑ふ時一座はその爲に明るくなつた。一寸した不快な事件があつて、其の夜となく浮かない氣分の此の俺だつたが、知らぬ間に何時か自分がひざくはしやぎ切つてゐるのを知つて自分ながら驚いてゐた。彼女はさうして、

せがんだが閻魔いつかな承知せず。ならぬこいはれ件の女スゴ／＼戻る後ろから赤鬼、青鬼氣の毒がつて「もしお前さん、化けて出るご言ひなさい」

ストーブの焰
くづれ落つるも
ピストルのバネの手ざはり
やるせなや
街のあかりに霧のふるさき
ぬす人の心を抱きて
大なる煉瓦の家に



作	創	煙	新	春	獵川	人	に
キ ネ	活 動 俺 は シ モ マ ニ 効 ア ム ボ ス (結)	畜 次 笑 轄 號 手 豫 す 帖 告 く 話	草 却 つ の 娘	不 木 氏 肖 略 像 骨 き 歴 審	田 功 奇 旅 覺 立 現	帖 歌 舞 映 品 小	新
ベ チ ア ム ボ ス (結)	虫 下 屋 の 驢 馬	街 轄 映	品 小	水 島 潤 之 介	甲 北 夢 村 賀 田	野 村 賀 田	新
一 條 榮	長 谷 川	古 泉 里 二 幸 十 二 夫 二	長 谷 川 修 修	平 島 ひ さ し 介	川 夢 村 賀 田	久 兼 三	新
子 伸 平							新
56	54	46	40	36	36	35	30
			66	65	42	40	32

卷之三

1

內容見本

『獵奇』というパラダイス

探偵小説が若くてカオスだったころ

芦迈 托
〔推理作家〕

柳廣孝（橫濱國立大學教育人間科学部教授）

これは探偵小説というジャンルがまた若く自由と可能性の別天地であつた時代の記録です。創作小説あり翻訳あり、評論あり犯罪実話あり、法医学豆知識もあればゴシップ欄まであり——それに“獵奇歌”つて、これは詩歌の投稿コーナーですか？ とにかくゴッタ煮で騒がしく、時には脱線したりもするけれど、この一見チープな雑誌は、探偵小説が深夜アニメのようにメジャーのようでマイナーで、ひそやかに、けれど熱狂的に愛されていた事実を伝えてくれるのです。

いつたビッグネームのほかに西田政治、山下利三郎、岡戸武平、本田緒生といったミステリ史上の人々。さらには左頭弦馬、小舟勝二といったわずかな作品が知られる限りのマイナー・ポエットたちともひょっこり出くわすことができるのです——「そうか、あなたたちは『獵奇』というパラダイスの住人だったのですね！」と。

かつて、このジャンルが「推理小説」と銘打たれ、表舞台にこそ躍り出たけれども、何だか息苦しく不自由な時代を迎えたことがありました。そこでは現実離れや遊び心、何よりアマチュアリズムが排除されていました。その時期を過ごした私などには、『獵奇』の誌面が何とも新鮮で、むしろ自分たちに近いものを感じずにはいられません。

ここにあるのは、現在のコミケ、コミティアなどに花開いているプロアマ混成の同人文化の先駆です。ですから、古き良き探偵小説を愛する人のみなならず、こうしたカオスを理解するみなさんこそ、この八十数年前のリトル・マガジンをお読みいただきたいのです。

いつたビッグネームのほかに西田政治、山下利三郎、岡戸武平、本田緒生といったミステリ史上の人々。さらには左頭弦馬、小舟勝二といったわずかな作品が知られる限りのマイナー・ポエットたちともひょっこり出くわすことができるのです——「そうか、あなたたちは『獵奇』というパラダイスの住人だったのですね！」と。

かつて、このジャンルが「推理小説」と銘打たれ、表舞台にこそ躍り出たけれども、何だか息苦しく不自由な時代を迎えたことがありました。そこでは現実離れや遊び心、何よりアマチュアリズムが排除されていました。その時期を過ごした私などには、『獵奇』の誌面が何とも新鮮で、むしろ自分たちに近いものを感じずにはいられません。

ここにあるのは、現在のコミケ、コミティアなどに花開いているプロアマ混成の同人文化の先駆です。ですから、古き良き探偵小説を愛する人のみなならず、こうしたカオスを理解するみなさんこそ、この八十数年前のリトル・マガジンをお読みいただきたいのです。

昭和初期「獵奇病患者」なる語が流行した。度を越して「奇」を漁る人々の総称である。陳腐で平凡な日常に我慢できなくなつた人々は、より異常なもの、怪奇なものを求めて巷をさ迷い歩く。銀プラ、キネマ、カフェなどではもはや刺激にならない。幽霊が出ると噂の宿屋に宿泊する。人の恐れる魔境を探つてみる。こうした「獵奇病患者」にとって、江戸川乱歩に代表される変格探偵小説の世界は理想郷だつたろう。『獵奇』2巻5号で山下利三郎が言うように、探偵小説作家は神秘怪異を創造する。そしてそれを破壊する。神秘怪異の創造も破壊も、「獵奇病患者」にとっては最高の快楽に値する。その意味で「獵奇」とは、探偵小説という場所に囚われた「獵奇病患者」の内実を示す、一種のガイドブックなのだ。

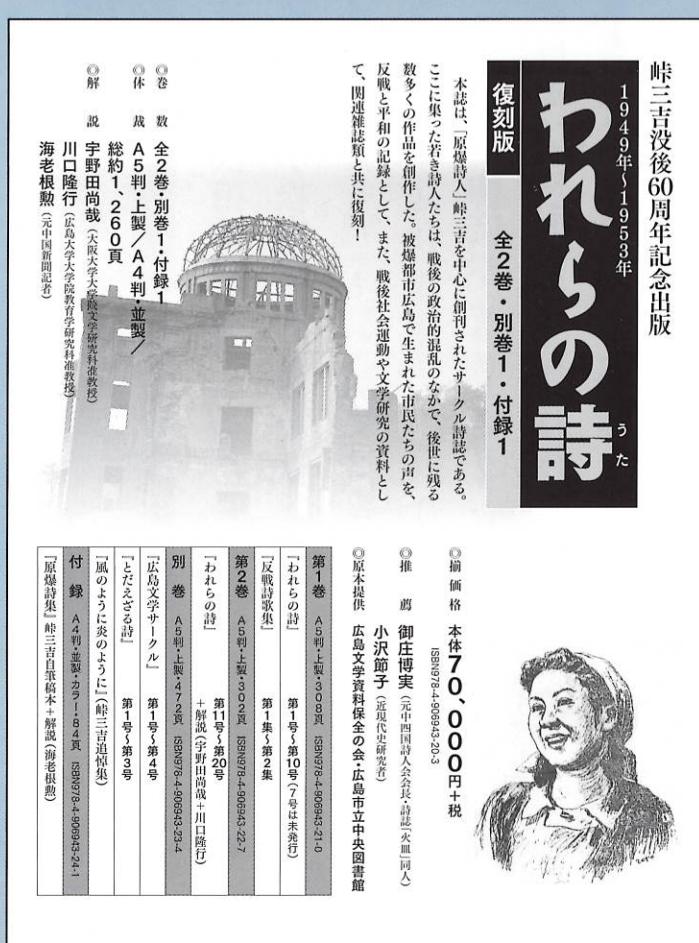
したがつて「獵奇」には、この時代の流行になりつつあつた「獵奇」の内容も克明に報告されている。単なるエロ・グロでは收まりきらない「奇」に対する、溢れ出るような思い。探偵小説というフレームの中で紹介される多様な「獵奇」の様相は、現代の我々をも強く惹きつける。『獵奇』は、単なる探偵同人誌ではない。反日常的な世界に刺戟され、変態心理学や精神分析に関心が集まつた昭和初期において、怪異に取り込まれた「獵奇病患者」たちの記録としても、多大な関心を持たれることは間違いない。



內容見本

CINEMA NUMBER!

秀つべの幕舌政治四ます
う・帳から出た真。
耽綸社成立。
あ・芋の煮えたも御存じない。
の・一條榮子のモダンぶり。
の・咽喉元過れば熱さ忘るる。
お・鬼に金棒。
く・腐つても鰯。
城昌幸。
や・安物買の錢うしない。
ま・圓本の確なものなし。
ま・時かぬ種は生えぬ。
——原辰郎喰紛々。
け・藝が身を助ける。
——川口松太郎の腰扇。
ふ・武士は食はねど高揚子。
久山良子が櫻桂の彼方へ語らひました。
だが何う大きな足踏みせう!
二・子は三界の首
樹。——海軍少佐川功。
え・えてに帆を上る。



付録 『探偵・映画』 内容見本



Above, a love scene from Paramount Picture "The Evening Clothes" with Adolph Menjou. Below, Dorothy Sebastian and Joan Crawford at the dinner meeting.

